特集1

「環境政策手法とエネルギー政策」セッション

「『廃棄物とリサイクルの経済学』から『緑のエネルギー原論』へ―植田和弘教授の業績に学ぶ―」

寺　西　俊　一（一橋大学名誉教授）

皆さん，午前中から大変長丁場でお疲れのところを最後になりますが，寺西から簡単にプレゼンをさせていただきます．といっても，簡単なレジュメしか出しておりませんけれども．

実は，私もちょうど1年前に，35年ちょっと勤めておりました一橋大学を定年になりまして，同じように，いまごろの3月下旬に退職記念のシンポジウムを開かせていただいたばかりでございます．その後，縁があって帝京大学に転出しております．

今日は，午前はちょっと移動で時間がなくて，午後から参加させていただきまして，いかに植田さんがものすごい業績をつくられてこられたか，築いてこられたかというのは，もう目の当たりにした思いでございます．

植田さんの業績は，今日のこの記念公開シンポジウムでの，お弟子さんたちや門下生の皆さん，あるいは，影響を受けた皆さん方の，多様な研究報告等々をお聞きさせていただいて，そして，お集まりの皆さんを含めて，ここにまさに植田さんの業績の集大成があるなという感を強くしております．

時間が限られているということですので，3点だけお話をさせていただきます．あまり学問的な話にならなくて恐縮なんですけれども．

実は，植田さんとはもう三十数年にわたる学問的交流と協働の歴史がありまして，思い起こせば，本当に1時間，2時間，思い出話も含めていろいろあります．ちょうど1980年7月に，私が日本の大学で初めて経済学部の中に設置された，環境経済に関する専門講座，環境経済論の担当になりました．翌年，1981年6月に，植田さんが京都大学の経済研究所の助手として，環境経済部門の担当になられて，1年ずれはありますけれども，ほぼスタートは同じ時期であります．

1980年代の初めに，いわゆる環境と経済の関係の研究を本格的にスタートするという意味で，まさにスタートラインは，私の方が一歩早かったんですけれども，その後は，二人三脚的にもいろいろな共同作業をやったり，学会をつくったり，いろいろなことをやってきました．その簡単な経緯がここに書いてございます．

何せ植田さんの歩幅が，私の歩幅の3倍ぐらいあるんですね．そうすると，1980年代の後半から1990年代になると，完全に私の方がずっと遅れてしまって，植田さんがどんどん前へいくという印象ですね．もう二人三脚が組めなくなって，植田さんが独走される．私が必死になってその後を追い掛けるというような感じでございました．何とか三十数年，

植田さんといろいろなかたちで協働させていただいたことを大変ありがたく思っております.

植田さんというのは，やっぱり100年に1人，あるいは，1000人に1人か分かりませんが，もう大変な逸材ですね.

最初に彼と出会ったのは，ちょっとこの年表で,「1980年代半ば」と書いていますが，これは私の記憶違いで，先ほど，植田さんの経歴を見たら，彼がまだ助手の時代でしたから，経済学部の財政学の助教授になる以前に，東京で研究セミナーがあって，私がこれはぜひ聴いてみたいと思って，のこのこ出掛けていったのが最初の出会いなんですね．さっそうとして，背も高くて，大変なイケメンですし，本当にちょっとこの人は研究者かなと思うくらい，かっこいいスターが現れたという印象でした.

彼が何を報告したかというのは，いまでも鮮明に覚えていますけれども，当時，伊東光晴先生が確か京大におられたのではなかったでしょうか．伊東先生が団長で，中国の環境問題の調査団を組まれて，それに随行された．その中国の環境問題の，いわば調査報告というかたちだったと思います．そのころから，すでに中国の問題にかなり強いコミットメントを植田さんはされておられました.

その報告が，あまりにも鮮やかなので，この人はすごいと思って，名刺交換をしたら，何とこれが，京都大学の経済研究所につくられた，環境経済部門の助手だということで，これは一緒にやりたいということで，親交が始まっていくことになったわけです.

その後，1989年からは，学部のゼミレベルですけれども，今日お越しになっている，慶應大学の細田さん等々も含めて，学部ゼミの交歓セミナーというのを毎年12月にやるということになって，その後，5大学の環境経済学交歓セミナーとして，いまなお継続しておりますが，それで，植田さんとはいろいろと一緒になることが非常に多かったわけです.

1991年に，植田さんと図らずも意見が一致して，宮本先生の環境経済学を踏まえながら，もう少し多様なアプローチも組み込んだテキストブックをつくろうということで，有斐閣の『環境経済学』を一緒に出させていただいたのが共同作業の出発点です.

その後，学会をつくり，そして，最後が2012年4月から，昨年倒れられる直前まで一緒に仕事をさせていただきました学術調査としての大震災の研究ですね．そういうことで一緒にさせていただいてきたわけであります.

植田さんの研究者としての業績は言うまでもなく，この間，たくさんのご報告がありましたとおりですので，私は省略させていただきますが，金属利用の社会的評価，金属社会学，あるいは社会金属学というところから，廃棄物制御の財政論というかたちで，財政学の方にも幅を広げてきております.

それ以降，環境の問題，資源の問題，技術の問題，文化，地域，最終的には，広い意味での制度派経済学に近いのではないかと思っていますが，どのような制度をつくったらいいか．制度設計に関する理論的な検討，政策的検討，そういう非常に幅広な研究を推し進めになられて，たくさんの業績を出されておられます．それらについても，ちょっと重複になりますので，私のこのプレゼンでは割愛

させていただきます.

植田さんのすごさと言いますか，三十数年のお付き合いの中で，私が植田さんがすごいなと思っている点を３点だけ，まとめに代えて，ご紹介させていただきたいと思います.

植田さんは，やっぱりもともとから潜在的に大変な逸材だということは，もう皆さんご承知のとおりですけれども，彼が非常に私の刺激になって，一緒にいろいろと，彼と接点を持つことによって，私自身がものすごく勉強させられたのは，非常に国内外に目を広げて，現実の動向をよくつかんでおられる．非常に現実の動向をキャッチしておられると同時に，それに対応する学問動向というのをよく見ておられる．現実動向と学問動向というのを非常に鋭敏に捉える，これは，おそらく天性の感性みたいなものではないかなと思います.

そういう意味で言うと，鋭敏な感覚を持っておられて，そして，絶えず大局的に見て，先見的に今後の課題がどこにあるかということを提起されてきた．そういう意味では，非常に先見の明のある研究者ではないかと思います.

これは，私自身も，とかく自分の専門分野に閉じこもった，視野の狭さというものに陥りがちなのですが，植田さんとたまに会ってお話しすると，非常に視野が広がる．新しい発想が，新しい現実が，新しい理論動向が見えてくるという意味では，非常に学ぶところは多かったと思います.

それと，何と言っても，彼は工学，経済学と二つの分野で学位号を取っておられますけれども，非常に幅広い学識をベースにしているんですね．非常な勉強家であったということです.

私なんかは読む本は限られてしまうのですが，彼は本当に広く読んでいました．古典から現代に至るまで，非常によく幅広い学識を持ち，そして，その中から学際的，国際的な重要な研究課題について，彼は見事な組織者を続けてきたということだと思うんですね.

門下生の皆さんとの共同研究ももちろんそうでしょうし，いろいろな研究会を積極的に立ち上げられて，それで学際的共同研究を組織されていく．これがさらに実務家を入れたり，いろいろなかたちで，オーガナイザーとしての植田さんの力量たるや，これはもう私なんかまったく及ばないところでありまして，植田先生ならではということであります.

それとやっぱり今日の午前・午後が実証しておりますように，非常に多彩な学問的領域に広がって，非常に有能な後継者をたくさん育成し，輩出されてきた，優れた教育者でもあるということであろうかと思います.

私なんかは，その意味では，三十数年，彼よりは本来１年年上なので，先輩面しなければいけないんですけれども，最初は「植田君」と言っていたのですが，だんだん言いにくくなってきまして，「植田さん」と言って．そのうち「植田先生」と言わなければいけなくなって，最近では，もう本当に倒れる直前までは「植田大先生」というように，私の，対植田さんとの関係が，どんどん彼の方が見上げる存在になっていくという，大変なことでございました.

植田さんの一日も早い復帰を心待ちにしております．同世代，今日は北大の吉田さんや，慶應大学の細田さんなど，植田さんとともに学会を担ってきて，いろいろなことをやって

きた人間としては，本当に同世代の植田さんが一刻も早く，また一緒に，いろいろな刺激を与えてくださる，そういうかたちでの復帰を心から私は念願しております．

ぜひ，その日が来ることを祈念して，雑ぱくな話で，まともなプレゼンにならないんですけれども，実は，私のいろいろな思いがこみ上げていまして，ちょっと私にしては，いままでの登壇の中では一番滑舌の悪い話になってしまって，大変申し訳ございません．

以上で，ちょっとこの場の責を果たさせていただくことにさせていただきます．どうもありがとうございます．

○**諸富**　寺西先生，ありがとうございます．もうそれどころか，大変愛情のこもったプレゼンテーションをしていただきました．

私などから見ていましても，寺西先生と植田先生は，学会とか勉強会とか，東京で開かれた後，よくさっと，寺西先生とお二人で，さらになんか2次会みたいなところへ行かれている姿をよく見ましたので，非常にお互い理解し合った仲というお立場からの，素晴らしいお話をしていただいて，本当によかったと思います．

もうここで終わってもいいところではあるのですが，せっかくではございますので，最後のセッションの皆さま，ちょっとご登壇いただいて，残り時間，少しお話をしてみたいと思います．どうぞ席の方へ，よろしくお願い致します．